

# 南アルプス市立小笠原小学校学校関係者評価書

令和5年 9月21日(火)

学校関係者評価委員会作成

## 第一回 学校関係者評価委員会

実施日：令和5年9月4日(月)午後7時00分～

会 場：小笠原小学校校長室

評価者：学校関係者評価委員

名取 昇 (小笠原区自治会長, 学校評議員)  
土屋 正文 (山寺区自治会長, 学校評議員)  
齊藤 至 (元小笠原小学校校長, 学校評議員)  
藤巻 秀子 (民生委員 学校評議員)  
大柴 輝紀 (PTA会長 学校評議員)  
飯久保一男 (前小笠原小学校校長 学校評議員)  
新津 岳 (元市教育委員会教育部長 学校評議員)  
佐野 紳二 (校長) 深澤 鉄也 (教頭) 時田 和彦 (主幹教諭)

### 内 容

学校から提案の内容

- ①学校関係者評価の趣旨
- ②本年度の学校経営方針並びに現状
- ③学校評価の方法について
- ④評価の全体的な傾向について
- ⑤教職員自己評価シートの内容と結果について
- ⑥児童アンケートの内容と結果について
- ⑦1 学校評価から見られる成果や課題, ならびに改善策について

## 《学校関係者評価書》

### I 学校関係者評価委員から出された主な意見

※「①, ②, ③…; その他」: 評価項目 「・」: 評議員から出た意見 「→」: 学校の回答

#### 【全体評価について】

- ・ 学校教育目標から, アンケートを実施し, 分析・改善に向けての取り組みまで示されていて素晴らしい。
- ・ 学校経営方針に基づいて, 日々先生方が教育活動に真摯に取り組んでいるため, 学校評価の結果がおおむね良好な水準になっていると感じる。
- ・ 学校が楽しく思っている児童が多く, 教職員による教育活動がしっかりなされていると感じる。
- ・ ICT環境や「Simple」プログラムの取り組み等, 小笠原小学校は設備や取り組み面でとても優れていると感じる。

## 【教職員自己評価について】

- ⑧「教材・教具（ICT機器を含む）を効果的に活用する授業を行っていますか。」
- ・小笠原小学校が「学びの質を高める授業づくり推進事業指定研究校」となっているが、研究体制への市教委からのバックアップが十分なされているかが気にかかっている。
  - ・ICTの活用については若手の教職員に詳しい人材が多いと思われるので、これまでの実践にとらわれず積極的に活用してもらい、実践を積み重ねてほしい。その実践を承認・共有していきたい。
  - ・学校からの宿題でchromebookを家庭に持ち帰ってきているが、宿題以外のことにも使用している様子が見られる。具体的には、スクラッチを使ったネットを使ったゲームであるが、親も制限していいかどうか迷っている。制限しようと思えばできるが、学校ではどのように指導しているかを知った上で対応したい。
- 子どもたちのchromebookの使用状況については、ログの解析をすればわかるので参考にしてほしい。
- ・各教室にプロジェクターがあり小笠原小学校は環境的に恵まれている。
- ⑩「あなたは、授業の始めに児童に授業のめあてを示していますか。」
- ・10%の職員が否定的な回答をしており、授業の仕方に懸念がある。
- めあてが示されない原因としては、問題とめあてが区別できていない職員、めあてを示す余裕が持てない職員、1時間の中で「めあて」から「まとめ」まで進められない授業内容があることなどが挙げられる。校内研や職員会議、終礼などを通じて、職員全体で、授業毎にめあてを示すことを徹底していきたい。
- ⑫「あなたは、児童理解のために、日頃から様々な方法でコミュニケーションを図っていますか。」
- ・先生方としては事前準備や事後処理等の取り組みが大変な中、しっかりと取り組んでもらいありがたく思う。
- ⑬「学校の教育活動について、おたよりやホームページを通して保護者や地域に広報していますか」
- ・否定的回答が目立っているが、校長が中心となりホームページでイベントや学校の様子を発信しておりしっかり広報されている。
  - ・各学年・学級の様子については、おたよりやホームページ等で発信はできているが、より充実させてほしい。
- ⑭「教育活動の中に地域の人材や施設を活用し、地域の教育力を生かす指導を行っていますか。」
- ・令和2年からのコロナ禍のため、地域の人材や施設を活用することが難しかったと思う。今年度は新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い、さまざまな活動制限が緩和されつつあるので、積極的な活用を進めてほしい。特に市教委の文化財課は有効活用をしてもらいたい。
- 学術・文化関係の地域人材・地域教材の活用が少なくなっている。コロナ禍で減ってしまい、その間に別の教育活動を行うようになってきたためだと考えられる。今後は活動制限が緩和された状況でどのような教育活動、地域人材・地域教材を活用していくかについて検討する必要がある。
- ・農園等、学校の教育活動への個人の貢献は大変大きな役割を果たしている。しかし、その協力が得られない場合は、学校の現状に合った教育活動への転換も必要だと考える。
- ⑮「Simple」プログラムの目的意識を理解して、指導に取り組んでいますか。」
- ・「Simple」プログラムとは、どのような取り組みなのか。
- 「Simple」プログラムとは、名城大学教授の曾山先生が開発した「スリム&シンプルな『かわりの力育成プログラム』」のことで『スリム&シンプル』を合わせた造語である。SST（ソーシャルスキルトレーニング）とSGE（構成的グループエンカウンター）を活用した4つのエクササイズからなり、「週1回短時間のグループアプローチ」「各教科等の授業場面におけるペア・

グループ活動」二つを核としている。この活動を通して、子どもたちに「かかわりの力」を育むプログラムであり、「かかわりの力」の構成要素である「ソーシャルスキル」「自尊感情」を育成している。楡形地区の小中一貫教育の基盤になる活動で、授業中のコミュニケーションが活発になってきている。学校関係者評価委員会のみなさんに参観してもらう機会を設けたい。

- ・「Simple」プログラムについては、9年間の積み重ねの効果が大きい。小学生にはコミュニケーションが取れない子が多いが、小笠原小学校の子どもたちはコミュニケーション能力が高いと感じる。授業中自分の考えを伝えられない子やあいさつのできない子が多い学校もある。

その他

- ・今年度の職員は、多忙感を感じているのか。教職員の自己評価ですべての項目でAをつけた職員はどのように感じているのかが気になる。
- 今年度の時間外勤務時間を見ると、月平均4.5時間以上の教職員の割合が約39.4%（13/33）（平成5年4月～8月末）という状況で多忙な勤務状況であることがわかる。原因としては、若手教員が多く、初めて担任する学年に所属している教員が半数いること、授業準備や児童・保護者対応、諸会議等に時間がかかることが挙げられる。改善策として、自分の心身の健康を一番大切にすることを伝えたり、夏季休業日・冬季休業日に積極的に休暇を取得することを推奨したりしてきたが、効果的な多忙化改善は難しい状況である。学校における業務全体を大胆に見直すべき時期であると感じる。
- ・コロナ禍が収束して、学校行事をもとに戻す動きがみられるが、全てをもとに戻すと多忙化に拍車をかけることになる。行事については戻すべきものと戻さなくていいものを見極める必要がある。若手が翌日の授業準備に時間がかかるのは仕方のないことであるが、ベテランの教員との分担・協働を図り、改善していきたい。
- ・多忙化についてのアンケート項目がないことが気になる。効率的に業務の推進を行っていくことが大切だと考える。

#### 【児童アンケートについて】

##### ⑥「私は無言清掃をしている。」

- ・評価が低い一因として、無言清掃に対する児童一人一人の捉え方が違うことがだと考えられる。「清掃パトロール」の様に、清掃に必要な話まで注意するような児童がいるのであれば、無言清掃の取り組み方について説明する必要がある。また、清掃に必要ないことを話している児童にも無言清掃の意義と取り組み方について繰り返し伝える必要がある。

##### ⑪「私は、授業中に自分の考えを伝えている。」

- ・肯定的な回答が少ないのは意外だと感じた。肯定的な回答が増えるような取り組みがないか検討して実施してほしい。

##### ⑭「わたしは、自分からあいさつしている。」

- ・日常の中で接している子どもたちの7割はあいさつができていると感じており、アンケート結果と合致している。他の学校に比べて、あいさつのできる子どもが多いと感じる。近年、世の中に不審者等の悪い人が多く、日頃から子どもたちに気を付けるように指導をしているため、あいさつにも影響が出ている。しかし、あいさつが多い地域ほど犯罪が少ないというデータもあるため、取り組みを進めてほしい。
- ・児童アンケートの「あいさつをしている」「きまりを守っている」「無言清掃をしている」については、児童会の取り組みとマッチしているのか。取り組みの中にあるのであれば、児童会の取り組みからのアプローチも重要だと考える。

## 【その他】

- ・小笠原小学校の児童は、積極的にあいさつをしたりコミュニケーションを取ろうとしたりする能力が高いと思う。
- ・学校評価の結果が8月中にできているのであれば、事前に資料を配付していただければ、しっかりと検討した上でこの会議に臨める。

## II 今後の改善策・重点課題について

※「・」：学校で考察した改善策・課題

- 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、教職員一人一人の課題意識をもって授業改善に取り組み、思考力・判断力・表現力の育成に努める。
  - ・『自分を大切に、他者を大切にする』子どもの育成を目指して、校内研究を通して、教職員自ら学び合う。
  - ・楡形地区の小中学校5校と連携し、小中一貫教育の推進を図る。
  - ・あやめっ子タイムで培ってきたペアや小集団での学び合い活動を、「あやめっ子トーク」として授業の中に定着させる。
  - ・ICTを効果的に活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に実現する。
  - ・授業の中に「課題発見」「課題解決」の過程を取り入れ、学習者を主体とした授業づくりを行う。
  - ・子ども同士の意見交流の機会を設け、友だち考えを理解する力を育てる。
  - ・「なぜそう思うのか」「どこからそう思うのか」のように根拠を問う授業を行う。
  - ・学校での授業と関連づいた家庭学習の課題を与えたり、保護者への家庭学習の啓発を行ったりすることにより、家庭学習の活性化を図る。
- 子どもたちの健全な育成のために、学校・家庭・地域住民・関係機関が今後も連携を継続する。
  - ・学校と保護者が連絡を密にとり、連携・協働して、一人一人の子どもの育成を行う。
  - ・学校だよりや学年だより、学校ホームページなどで学校の教育活動の様子や教育方針を積極的に発信し、保護者や地域の理解や協力が得られるようにする。
  - ・コロナ禍の収束に伴い、PTA活動・ボランティア活動、地域人材や施設の活用等いろいろな協力活動の活性化を通して学校と保護者・地域の距離を縮め、子どもの育ちを共に考え、共に行う関係づくりを進める。
  - ・「あいさつをしている」「きまりを守っている」「無言清掃をしている」等の児童の課題については、教職員からの働き掛けだけでなく、子ども・家庭・地域の取り組みを充実させ、連携・協働して成果が出るようにしていく。
- 「全体を通して」
  - ・学校評価の結果から明確になった課題を教職員一人一人が自分事として捉え、主体的に改善に取り組むために、2学期中に全教職員に「改善策」を考えてもらう。その中から有効性が高いと思われる改善策に全教職員で取り組む。